

この半島には
豊かな資源と可能性がある

全国的に人口減少が進む中、20年前には約1800人いた俵ヶ浦半島の人口も現在は約1100人。このままのペースで人口減少が続けば、2060年には人口200人、うち8割が65歳以上になると見込まれています。

また、人口減少に加えて少子化も進み、平成28年には野崎中学校、29年には俵浦小学校、庵浦小学校が続けて閉校となり、地域の皆さんは厳しい現実を目の当たりにすることになりました。

このような状況の中、一方では地域活性化のための取り組みを進める動きも始まっていました。平成25年に始まった俵ヶ浦町の住民や観光関係者などによる地元の自然を活用した「トレイル(遊歩道)コースづくり」です。この事業に参加した九州大学景観研究室担当者の「何もしなければ地域が良くなる要素はないが、この半島には豊かな資源と可能性がある」という言葉で、町内会長や地元の若者の心に火が付き、住民全体で取り組む機運が一気に高まりました。

トレイルコースづくりには、地元の子どもたちやボランティア、海上自衛隊、米海軍佐世保基地などが協力し、3年間で俵ヶ浦町コースや庵浦町コースなど4つのコースが完成しました。

最初は「観光客が増えると自分たちの生活に支障が出るのではないか」と半信半疑な住民もいましたが、一緒に汗を流したことで豊かな風景や地域資源を再発見することができ、同時に少子高齢化や空き家対策、学校の統廃合など地域の課題に向き合うきっかけにもなりました。

「ヒトがオモテ」をスローガンに

トレイルコースづくり以降、4町それぞれの会合などでは、住民が日頃から抱えている悩みや関心事について話し合い、学校の統廃合や地域行事の継承、耕作放棄地などいろいろな意見が出る中で、「人口減少」が一番の課題であることが分かりました。

また、平成28年8月には4町合同で半島への思いを話し合う「俵ヶ浦半島ミーティング」を開催し、「10年後、どんな半島にしたいか」をテーマに話し合いました。ミーティングには地元だけでなく、市内外から多くの人が参加し、「若い人や子どもたちに来て住んでほしい」「生涯元気に健康に暮らせるまちにしたい」など「人」を中心とした議論が行われ、半島の魅力の源である「九十九島」を生かした地域資源(景観・自然環境・食・歴史)の活用が今後の半島の方向性だということが分かりました。こうした思いから、半島では「ヒトがオモテ」をスローガンに掲げ、ミーティングで出た意見を基に半島の未来予想図を作成しました。

特集

「ヒトがオモテ」の俵ヶ浦半島未来計画

地域資源と人が 主役のまちづくり

佐世保港や九十九島、市街地からほど近い俵ヶ浦半島。この半島では、地元の人々が主役となり、地域の魅力を生かしたまちづくりに取り組んでいます。今回の特集では、俵ヶ浦半島活性化の指針となる「俵ヶ浦半島未来計画」の概要やまちづくりに取り組む皆さんのインタビュー、本年4月にオープンした「半島キッチン ツッテホッテ」の取り組みなどをお知らせします。

俵ヶ浦半島

俵ヶ浦町、庵浦町、野崎町、下船越町の4町からなる俵ヶ浦半島。市中心部から車で約20分の場所に位置し、九十九島や佐世保港を望むことができます。「展海峰」や「花の森公園」「白浜海水浴場」など人気の観光施設や「丸出山堡壘観測所跡」などの日本遺産構成資産を有し、港まち佐世保のルーツを垣間見ることができます。



俵ヶ浦半島未来計画

俵ヶ浦半島では地域のみんが考える半島の未来を実現するため、半島活性化の指針となる「俵ヶ浦半島未来計画」を平成28年度に策定しました。「俵ヶ浦半島の魅力を活用し、人に来て、住んでもらうこと」をビジョンに掲げています。

地域のマネジメント組織を

俵ヶ浦半島未来計画では、地域が主体となり、半島全体で地域の魅力を生かした人口減少対策や地域行事などの持続的な運営を行い、2060年に500～千人規模の人口を維持することを最終的な目標としています。

計画を実現するためには、外部から経営資源(ヒト・モノ・カネ)を受け入れ、半島が持続的に活性化されるサイクルを創り出す仕組みが必要となります。

例えば、町単位で行っている公園や道路の草刈り業務は「人が集まらない」「いつも同じ人が対応している」などの問題を抱えています。町の枠を超え、地域全体で業務を管理することができれば、問題を解決する可能性が高まります。

このようなことから、半島では29年度に地元住民による計画の推進組織「チーム俵」を結成し、地域の経営資源をマネジメントして収益を得て、多くの事業を展開するための仕組みをつくりました。今後はこの「チーム俵」を中心に、トレイルコースなどを生かしたここでしかできない体験・交流型の事業や、半島に住むためのお試し住宅、空き家などを活用した住宅の整備などを行い、半島の魅力を生かした取り組みとそれを持続させるためのサイクルづくりを検討していくこととしています。

地域や年齢の枠を超えて取り組む

これまで俵ヶ浦半島では、4町の町内会長と役員で構成された「俵ヶ浦半島開発協議会」が半島活性化に向け、ウオーキングイベントや展海峰ふれあい工房の運営などを行ってきました。しかし、ボランティアに近い関わりには限界があり、高齢化や人材不足による負担増加、資金調達などが課題となっていました。

このような課題に対応するため、地元の情報共有などを行っています。また、県や市から公的支援を受け、集落支援員やまちづくりプランナー等の専門家に相談するなど、人材や専門性を取り入れ、地域が自走するための力をつけながら未来計画の実現に向けて活動しています。

俵ヶ浦半島未来計画のビジョン (平成28年度策定)

- ③年後 地域マネジメント組織(チーム俵)の自立
- ⑩年後 将来実現フローの確立 (時代・市場に応じた事業展開)
- ④0年後 500人～1,000人規模の人口維持 (時代に左右されない未来の拠り所)



俵ヶ浦半島ホームページ <http://www.tawara99.com/>



チーム俵の5つの部活

- ①ご当地部 地域資源を生かした商品開発などで半島での仕事づくりと収益化を目指します
- ②トレイル部 トレイルコースづくりや草刈りなどの景観整備、維持管理を行います
- ③住まい部 半島内の空き家を改修し、移住や定住の受け入れ支援を行います
- ④学校部 廃校を活用し、放課後子ども教室や地域拠点としてのコミュニティづくりを行います
- ⑤宣伝部 無料情報紙「俵ヶ浦半島TIMES」の発行やSNSなどを活用し、情報発信を行います

経験を生かして 地域おこしにチャレンジ! 久米川 泰伸さん(京都府出身)



本年7月から俵ヶ浦半島の「地域おこし協力隊員」になった久米川です。京都ではゲストハウスなどの仕事をしていたが、自然に近い暮らしに憧れて佐世保にやってきました。アウトドアが趣味なのでトレイルツアーに参加したり、地元の人などとたくさん交流したりして、これから俵ヶ浦半島の魅力をどんどんPRしていきたいです。販売やイベント支援などこれまで仕事で培ってきた経験を生かし、いろいろなことにチャレンジしていきますので、皆さんよろしくお願いいたします。(取材日 7月2日)

俵ヶ浦半島公園(仮称)の整備



佐世保市では、俵ヶ浦半島の魅力である自然や歴史資源を生かし、半島への集客や消費、移住を実現するために、現在「つくも苑」跡地(野崎町)を観光公園として活用する計画を進めています。この計画では、つくも苑開発以前に元々あった眺望の開けた丘陵地形を再生し、九十九島や港を行き交う船、針尾無線塔などの大パノラマを望める場の創出を目指しています。また、半島の魅力をさらに高めるため、チーム俵の取り組みなどを生かし、展海峰や花の森公園との一体的な観光活用を検討しています。



地域のみんが半島の未来を考えた「俵ヶ浦半島未来マップ」



現状に足し算をしていくことが 変わり始めるきっかけに

株式会社ルーツ・アンド・パートナーズ

佐藤 直之 さん

大阪府出身・福岡市在住、39歳

これまで佐賀県唐津市や東彼杵町などで地域活性化のサポートを行う。平成25年から九州大学と共にトレイル整備に参加し、俵ヶ浦半島の活性化に携わる

まちづくりの鍵は「担い手」

これまでいろんな地域でまちづくりを支援してきた佐藤さん。まちづくりの重要な鍵は「担い手」だと話します。ワークショップや計画の策定など、やり方は地域によってさまざま。せっかくいい計画を作っても、担い手がいなために実行できずに終わってしまうこともあるそうで、そんな中、俵ヶ浦半島では5人の若者が手を挙げてくれたことに感銘を受けたそうです。

また、「この半島ではトレイルコースづくりをきっかけに、みんなが地域の課題を自然に感じていました。計画を作るのが目的ではなく、具体的な課題から計画を作ることができたところが良かったですね」と計画づくりを振り返り、「新しいことを始めようとする、何かしらの抵抗がある。それを踏まえた上で、地域の皆さんの理解を得ながら、焦らず一つずつ実行していくことが大切だと思います」と話しました。

自然環境だけでなく

人の良さが詰まった地域

佐藤さんがこの半島を訪れてまず感じたのは「大切に守られてきた自然環境」と「美しい景観」が残されていることでした。「商業施設もなく、人によっては寂しい地域と思うかもしれませんが、

インターネットが普及した都心部では、その利便性の良さから人との交流がだんだん希薄になっていきます。でも反対に、人は人を求めている。そういう意味では、地方の方が都会より暮らしが豊かであると言えるのではないのでしょうか」と佐藤さん。

以前、家族とこの半島でウォーキングをしていたときのこと。佐藤さんの子どもが転んでけがをした姿を見て、地域の人々がすぐに駆け寄り、近くの野草で手当をしてくれたらそうで、その姿を見た佐藤さんは、地域の皆さんが自然の中で生きる力を持っていることに驚き、人間としての豊かさを感じたそうです。

「この半島には、自然や景観だけでなく、人の優しさも詰まっています。これらをどう生かしていくかがこれからのポイントになると思います」と話します。

「何も無い」では変わらない

「地方の人は地域の課題に気付いていても、解決に向けて一歩踏み出すことに消極的になることがありますね」と問題を指摘する佐藤さん。地方の人は、自分たちのまちには何も無いとネガティブに考え、100点の状態から

地域の悪いところをマイナスしていく人が多いそうです。

「地域にとってプラスになるものを探し、時間を掛けて一つ一つ試しながら増やしていく。現状に足し算をしていくことが、地域が変わり始めるきっかけになるんです」と話す佐藤さんは「何も無いから」では地域は何も変わりません。地域によって人や資源もそれぞれ異なりますので、人任せにせず、試行錯誤を繰り返して、まちの良さを見つけていくことが必要であり、これらを通じていくことが今後の地域の自立につながると思います」と続けました。

「俵ヶ浦半島では、地域の課題解決に向けて日々取り組んでいます。地域の主体となるチーム俵や発信源となるツッテホッテなどの土台ができ、少しずつ可能性が見えてきたので、これからも応援していきたいです」と笑顔で意気込みを話してくれました。

（取材日 6月26日）



半島に利益を生むことを目指し 田舎だけどやるときはやります！

半島キッチン ツッテホッテ 店主

中里 竜也 さん

野崎町出身・在住、38歳

大学進学を機に佐世保を離れ、33歳で帰郷。漁師をしながらチーム俵ご当地部の部長として、俵ヶ浦半島の活性化に取り組む

芽生えた使命感

「チーム俵の活動をきっかけに地元が好きになりました」と話す中里さん。チーム俵学校の部長で消防団などでも共に活動していた森宗幸彦さんに誘われてこの活動に参加しました。

活動を始めたころは地元に対して特別な思いはなかったという中里さん。人口減少に対する危機感もありありませんでしたが、学校の統廃合を目の当たりにしたり、人口の統計データを見たりしているうちに「この先の町は存続できるのか」と考えるようになりました。

そんな折、半島の案内所「ツッテホッテ」の運営の話をもたらしたときは「もし失敗したら、この半島にいらなくなるのではないか」という不安や焦りを感じたそうです。若手世代で他にできる人間もいないし、誰かがやらないうけない」と店主になることを決心しました。

「昔に比べると漁に出る回数も減りましたが、今はそれ以上にこの仕事を楽しんでいきます」と笑顔で話す中里さん。調理に関わる地元のお母さんたちや応援してくれる地域内外の人たちと関わる中で、次第にやりがいを感じるようになったそうです。

地元の人々の理解を得ながら

チーム俵の収益源となるツッテホッテ。その店主を務める中里さんは、「ぶれあい工房時代は品数も多く、地元の人からは『昔が良かった』という声もあります。しかし、当時はボランティアに近い形態で運営していたこともあり、地域に正當なお金を分配できていませんでした。それを何とか変えたいんです」と話します。

「店も変わり、地域の人との関わり方も変わる中で、ぜひ以前利用していた人にも戻ってきてほしい」と中里さん。まだスタートして間もないお店ですが、地元の人たちの理解を得ながら、多くの人に利用してもらえるように、日々頑張っています。

パートナーと共に考えて実行する

試行錯誤を重ね、みんなで作り上げた俵ヶ浦半島未来計画。中里さんは「地方創生や地域活性化と言われなくても、私たちは素人なので自力で全ての理想を叶えることはできません。市やまちづくりサポーターなど、地域外の人たちとの協力が欠かせません」と話します。

事業の進め方やお金の有効な使い方など、さまざまなか

とを地域外の先導してくれる人たちと共に考え、その仕組みを主役である地域が納得した上で実行しないと、これから持続可能な活動にならないと感じているそうです。意見のぶつかり合いもしばしばですが、お互いに何でも話し合える良きパートナーとして共に活性化に向けて取り組んでいます。

誇りを持って地域の魅力を発信

「新しいことを始めるといのは、本当に大変です。しかし、この活動を始めて地元を誇りを持てるようになりました」と笑顔で語る中里さん。

「ご当地部は半島に利益を生むことが最大の目的。『田舎だから何にもない』ではなく、『田舎だけどやるときはやる。俵ヶ浦半島には他のまちにないものを持っている』という気持ちで胸に、これからも半島の魅力をPRしていきたいです」と目を輝かせました。

（取材日 6月26日）



地元の食材を生かしたメニューで俵ヶ浦を伝える半島の案内所

半島キッチン ツッテホッテ

年間約18万人が訪れる展海峰に、ことし4月「半島キッチン ツッテホッテ」がオープンしました。地元の食材を「釣って」「掘って」が名前の由来となっているこのお店では、半島ファンの獲得に向けて、現在さまざまな取り組みを行っています。

受け継がれる地域への思い

元々は「展海峰ふれあい工房」だったツッテホッテ。今から16年前、当時の俵ヶ浦半島開発協議会・会長で一人倍郷土愛が強かった故・川内憲一さん(庵浦町)が「展海峰を訪れた人が素通りして帰る状況を何とかしたい」という思いから工房をオープンしたのが始まりでした。

当時、地域住民のボランティアによって運営されるお店は珍しく、折り紙陶芸や手工芸品の工房、地域農産品などの販売を行っていましたが、次第に観光客への対応が十分でなくなり、地元でも「店名や外観からは何のお店か分かりづらい」「観光客のニーズに対応できていない」などの声が上がりました。

品にも活用されることで、半島を訪れた人に地元の食材を味わってもらえるようになりました。

このように、地元住民の皆さんが無理なくお店に関われる仕組みを整えていくことで、地域経済に新しい流れを生み出し、半島の活性化につなげていくことを目指しています。

地元主婦が考えた手作りメニュー

ツッテホッテでは、訪れた皆さんに半島ファンとなってもらうため、新たな商品の開発に取り組んできました。現在お店の看板メニューとなっている「俄コロッケ」や「フィッシュ&チップス」もその一つです。

商品の開発に当たっては、チーム俵のご当地部が中心となり、地元主婦や地域の人たちがアイデアを出し合いました。「展海峰にふさわしい商品」として、海と山の二面性、観光客が訪れる地域性、お店を続けていくための継続性、独自性などを考えた上で、半島ならではの地域産品として「イモ類」「海藻」「鮮魚」「かんきつ類」に着目し、商品化するまでに何度も試作を繰り返して、関係者などを招いた試食会などを重ねた末に現在のメニューが完成しました。

地域の課題となっていました。

そこで立ち上がった「チーム俵」。「これまで大切に守られてきたお店を何とかしたい」「地域の先輩たちの『半島を元気にしたい』という思いを受け継ぎ、半島を体感してもらえ、お店にしたい」という思いからご当地部が中心となって工房を改修し、ことし4月に新たな観光の玄関口として生まれ変わりました。

半島の稼ぐ力を生み出す

ツッテホッテでは、地元産品を使った「俄コロッケ」や「フィッシュ&チップス」などの軽食販売、地元の野菜や海藻など旬の食材を販売していますが、一方で「半島の仕事づくり」としての役割も担っています。

例えば「フィッシュ&チップス」の材料に使われている魚やジャガイモは地元産のものを使用しており、住民の皆さんから仕入れを行っています。これまで釣り魚は家で食べるか、近所に配るだけでしたが、お店ができたことにより住民の新たな収入源となり、商

これからも半島への熱い思いを持った主婦の皆さんたちによって、手軽に味わえるメニューを考えていきますので、ぜひ一度ご賞味ください。

元気な俵ヶ浦半島にお越しください

これからもたくさんの方に半島の魅力を楽しんでもらえるように、チーム俵では半島の可能性を探ります。

現在は軽食や地元農産物の販売が中心ですが、今後はトレイル部の活動で伐採した木を薪にして販売したり、地元漁師と協力して釣り情報を発信したりするなどして、地域の可能性や新たな半島ファンの幅を広げていきます。

今後は、地元の人が主体となつてまちづくりに参加できる仕組みづくりを行っていくとともに、これからの収益事業拡大によってチーム俵本来の目的である「地域課題の解決」につなげることで、これからますます半島を元気にしていきますので、皆さんぜひ俵ヶ浦半島にお越しください。

【問い合わせ】

営業時間 9時～18時 定休日 水曜場所 船越町403(展海峰駐車場横)半島キッチン ツッテホッテ ☎28・3241

ツッテホッテを支える皆さんに聞きました

趣味が地域の手助けに 森宗 靖彦さん(野崎町在住)



魚釣りが趣味で、仕事が休みの日などは自分の船で海に出ています。これまでは魚を釣っても食べきれずに人にあげていましたが、現在はツッテホッテに納品しています。

10年以上釣りをしてきましたが、これまで釣った魚を売るといふ考えはありませんでした。今はこうしてツッテホッテで買い取ってもらえるので、餌や船の燃料代などの負担が減り、ますます釣りが楽しみになりました。また、お店でおいしく調理され、お客さんに食べてもらえるので、とてもうれしく思います。

地域のみんなが半島活性化に向けて一生懸命取り組んでいますので、私も自分にできるかたちで協力していきたいと思っています。

(取材日 7月2日)

孫の喜ぶ顔を見るために 富永 恵子さん(下船越町在住)



趣味でアオサ採りや家庭菜園をしています。ふれあい工房だったころ、当番で店にアオサを持参したことがきっかけで納品するようになり、現在もアオサを納品しています。定年後に始めたこの趣味も、今では生きがいになっており、その売り上げで孫たちにお菓子を買ってあげることが今一番の楽しみです。

アオサは、食べる人の気持ちになって一つ一つ丁寧に採るように心掛けていて、お嫁さんが商品のプリントを手伝ってくれています。私一人ではできないことなので、家族にも恵まれて本当に幸せです。これからもお客さんや家族に喜んでもらえるように、おいしいアオサを皆さんに提供していきたいです。

(取材日 7月3日)



1 ツッテホッテのロゴマーク 2 ツッテホッテの外観 3 店外からの眺望 4 人気のメニューの俄コロッケ(4個セット600円)、フィッシュ&チップス(600円)、かんきつ蜜ドリンク(390円) 5 お客さんに笑顔で対応する店主の中里電也さん 6 地元主婦の皆さんと開発したメニューの試食・講評を行う関係者の皆さん